

中国六朝古小説訳注『列異伝』(二)

先 坊 幸 子

『列異伝』訳注は、六朝古小説研究のための基礎資料収集とその読解を目的とし、現在続けている「中国六朝古小説訳注」作成の一部である。

魏・文帝『列異伝』は、六朝期に於ける志怪小説集の一つである。しかし現在では既に失われ、類書等に引用されている説話を残すのみとなっている。それらの説話は『列異伝』として魯迅『古小説鈎沈』にまとめられている。『隋書』経籍志・雜傳に「列異伝三卷 魏文帝撰」とあるが、『舊唐書』経籍志・雜傳類および『新唐書』藝文志・小説家類は晉・張華の撰とする。文中には文帝以降である「景初(二三七)二三九年」、「正始(二四〇)二四九年」、「甘露(二五六)二六〇年」年間のことが記されており、後に増補されたものか、或いは別の撰者の『列異伝』と混同されたものか、正確なところは分らない。

この度は『古小説鈎沈』を参考に、全四十七条の内「08 鮮于冀」から「16 蔣子文」までの九条を取り上げ、類書所引『列異伝』を用いて字句の校勘をした上で訳注を施した。「01 陳倉祠」から「07 樂侯」までは、『安田女子大学紀要』第40号(平成二十四年二月)に掲載済。

08 鮮于冀

① 西河鮮于冀、建武中爲清河太守。言出錢六百萬作屋、未成而死。趙高代之、計功用錢、凡二百萬耳。④ 五官黃秉功曹劉商言是冀所自取、便表沒冀田宅奴婢、妻子送日南。俄而白日、冀鬼入府。與商秉等共計較、定餘錢二百萬、皆商等匿。冀乃表自列付商。上詔還冀田宅。

① 西河の鮮于冀、建武中に清河太守と爲る。錢六百萬を出して屋を作ると言ふも、未だ成らずして死す。趙高之に代はり、功用の錢を計るに、凡そ二百萬なる耳。五官の黃秉・功曹の劉商、是れ冀の自ら取る所ならんと言へば、便ち表して冀の田宅・奴婢を沒し、妻子を日南に送る。俄にして白日、冀の鬼府に入る。商・秉等と共に計較するに、定めて餘錢二百萬、皆な商等匿すなり。冀乃ち表して自ら列して商を付す。上詔して冀の田宅を還す。

【通釈】

西河の鮮于冀は、建武年間に清河太守になった。六百万の錢を出して建物を作ると言っていたが、完成しない内に亡くなった。趙高がこれに代わり、必要経費を計算すると、およそ二百万程度であつ

た。五官の黄秉と功曹の劉商が、これは冀が自分で着服したのでだろうと言うので、直ぐに上表して冀の田畑や屋敷・召使いを没収し、妻子は日南郡に送った。にわかに昼日中、冀の幽霊が役所に入ってきた。商や秉らと共に計算して調べると、はたして二百万以外の銭は、全て商らが隠匿していたことが分かった。冀はそこで上表して自ら商を訴えた。天子は詔を下して冀の田畑や家宅を返還した。

【語釈】

*この話は『太平御覽』八三六に見える。また、この事は『水經注』九、『太平廣記』三二六に引く『水經』に見える。

①西河―郡名。漢に置かれた。今の山西省西北部および綏遠省南部の地。治は富昌。

②建武―年号。後漢の光武帝（劉秀）の時。二五～五六年。『水經注』及び『太平廣記』は建武二年のこととする。

③清河―郡名。漢に置かれた。河北省の清河・故城・棗強・南宮、山東省の清平・恩・冠・高唐・臨清・武城の地。

④五官黄秉―「五官」は、漢の官名。宮中の宿衛などを掌る。「黄」字、四庫全書『太平御覽』は「曹」に作る。

⑤功曹劉商―「功曹」は、漢の官名。書史を司る下役。郡の属吏。「商」字、『水經注』及び『太平廣記』は「適」に作る。

⑥日南―郡名。漢に置かれた。現在のベトナム中部に当たる。

09 壽光侯

①壽光侯者、漢章帝時人、劾百鬼衆魅。有婦爲魅所疾、侯劾得大蛇。又有大樹、人止之者死。侯劾樹、樹枯。下有蛇、長七八丈、

縣而死。

壽光侯は、漢の章帝の時の人にして、百鬼衆魅を劾す。婦有りて魅の疾ましむる所と爲り、侯劾して大蛇を得たり。又大樹有り、人々に止まる者は死す。侯樹を劾するに、樹枯る。下に蛇有り、長さは七八丈、縣かりて死す。

【通釈】

壽光侯は、漢の章帝の時の人であり、多くの妖怪を劾した。ある婦人が妖怪に病気にさせられ、侯は劾して大蛇を退治した。また大きな樹があり、その下に止まった者は死んでしまった。侯が樹を劾すると、樹は枯れた。その下に、七八丈ほどの長さの蛇が、懸かって死んでいた。

【語釈】

*この話は『太平御覽』九三四に見える。

①壽光侯―後漢の人。方術を使った。（『後漢書』方術傳）

②章帝―後漢の第三代皇帝。諱は炆。廟号は肅宗。明帝の第五子。

年号は建初（七六～八四年）、元和（八四～八七年）、章和（八七～八八年）。（『後漢書』三）

③劾―さばく。罪状を取り調べる。

④人止之者死―『太平御覽』はこの後に「鳥過亦死」（鳥過るものも亦た死す）四字がある。

⑤樹枯―この二字、『太平御覽』は「夏枯」に作る。

10 蘇娥

蒼梧廣信女子蘇娥、行宿高要鵠奔亭。爲亭長龔壽所殺、及婢致富。取其財物、埋致樓下。交趾刺史周敞、行部宿亭。覺壽奸罪、奏之、殺壽。

蒼梧廣信の女子蘇娥、行きて高要の鵠奔亭に宿る。亭長龔壽の殺す所と爲り、婢の致富に及ぶ。其の財物を取り、致を樓下に埋む。交趾刺史周敞、行部して亭に宿る。壽の奸罪を覺り、之を奏し、壽を殺す。

【通釈】

蒼梧郡廣信県の蘇娥という娘が、出掛けた折に高要県の鵠奔亭に泊まった。亭長である龔壽に殺されてしまい、女中の致富も殺された。壽はその金銭や品物を自分のものにし、致を樓の下に埋めた。交趾刺史の周敞が、領内の視察の際にこの宿に泊まった。壽の奸罪に気づき、この事を奏上し、壽を殺した。

【語釈】

*この話は『文選』江淹「詣建平王上書（建平王に詣りて上書す）」の注および『太平御覽』一九四に引く『列異傳』に見える。また、この事は『文選』江淹「詣建平王上書」の注および『太平御覽』一九四に引く『謝承後漢書』、『北堂書鈔』七九に引く『漢書』、『搜神記』卷一六（『太平御覽』八八四、『太平實字記』一五九引、『水經注』三七、『還冤志』（『太平廣記』一二七引）、『法苑珠林』九二に引く『怨魂志』に見える。

漢、九江何敞、爲交州刺史、行部到蒼梧郡高安縣、暮宿鵠奔亭。夜猶未半、有一女從樓下出、呼曰「妾姓蘇、名娥、字始珠、本居廣信縣、修里人。早失父母、又無兄弟、嫁與同縣施氏。薄命夫死、有雜綰帛百二十疋、及婢一人、名致富。妾孤窮羸弱、不能自振、欲之旁縣賣綰。從同縣男子王伯、賃車牛一乘、直錢萬二千、載妾并綰、令

致富執轡、乃以前年四月十日、到此亭外。於時、日已向暮、行人斷絕、不敢復進、因即留止。致富暴得腹痛、妾之亭長舍、乞漿取火。亭長龔壽、操戈持戟、來至車旁、問妾曰「婦人從何所來。車上所載何物。丈夫安在。何故獨行。」妾應曰「何勞問之。」壽因持妾臂曰「少年愛有色、冀可樂也。」妾懼怖不從。壽即持刀刺脅下、一創立死。又刺致富、亦死。壽掘樓下合埋、妾在下、婢在上。取財物去。殺牛燒車、車缸及牛骨、貯亭東空井中。妾既冤死、痛感皇天、無所告訴。故來、自歸于明使君。」敞曰「今欲發出汝屍、以何爲驗。」女曰「妾上下著白衣、青絲履、猶未朽也。願訪鄉里、以骸骨歸死夫。」掘之果然。

敞乃馳還、遣吏捕捉、拷問具服。下廣信縣驗問、與娥語合。壽父母兄弟、悉捕繫獄。敞表壽「常律殺人、不至族誅。然壽爲惡首。隱密數年、王法自所不免。令鬼神訴者、千載無一。請皆斬之、以明鬼神、以助陰誅。」上報聽之。（『搜神記』一六）

漢、九江の何敞、交州の刺史と爲り、行部して蒼梧郡高安縣に到り、暮れに鵠奔亭に宿る。夜猶ほ未だ半ばならず、一女有りて樓下從り出で、呼びて曰く「妾、姓は蘇、名は娥、字は始珠、本は廣信縣に居り、修里の人なり。早に父母を失ひ、又た兄弟無く、同縣の施氏に嫁與ぐ。薄命にして夫死し、雜ろの綰帛百二十疋、及び婢一人有り、名は致富なり。妾は孤窮羸弱にして、自ら振ふ能はず、旁縣に之きて綰を賣らんと欲す。同縣の男子王伯從り、車牛一乘を、直錢萬二千にて賃ひ、妾并びに綰を載せ、致富をして轡を執ら令め、乃ち前年四月十日を以て、此の亭外に到る。時に於て、日已向暮れに向かひ、行く人斷絶し、敢へて復た進まず、因りて即ち留止す。致富暴に腹痛を得、妾亭長の舍に之きて、漿を乞ひて火を取る。亭長の龔壽は、戈を操り戟を持して、來りて車旁に至り、妾に問ひて曰く「婦人、何所從り來る。車上に載する所は何物ぞ。丈夫、安にか在る。何の故に獨り行く」と。妾應へて曰く「何ぞ勞めて之を問ふ」と。壽因りて妾の臂を持して曰く「少き年より色有るを愛し、樂しむ可き

ことを冀ふなり」と。妾懼怖して従はず。壽即ち刀を持ちて脅の下を刺し、一創にして立ちどころに死す。又た致富を刺し、亦た死す。壽樓下を掘りて合はせ埋め、妾は下に在り、婢は上に在り。財物を取りて去る。牛を殺して車を焼き、車缸及び牛骨は、亭の東の空井中に貯ふ。妾既に宛死し、皇天を痛感せしめんとするも、告訴する所無し。故に來りて、自ら明使君に歸す」と。敵曰く「今汝が屍を發き出さんと欲するも、何を以て驗と爲さん」と。女曰く「妾は上下白衣にして、青絲の履を着け、猶ほ未だ朽ちざるなり。願はくは郷里を訪れ、骸骨を以て死夫に歸せん」と。之を掘るに果たして然り。敵乃ち馳せ還り、吏をして捕捉せ遣め、拷問すれば具に服す。廣信縣に下して驗問するに、娥の語と合ふ。壽の父母兄弟、悉く獄に捕繫せらる。敵壽を表すらく「常律の殺人は、族誅に至らず。然れども壽は惡首爲り。隱密すること數年、王法自ら免れざる所なり。鬼神をして訴え令むる者、千載に一も無し。請ふ皆な之を斬り、以て鬼神を明らかにし、以て陰誅を助けん」と。上報じて之を聽す。

- ①蒼梧廣信——蒼梧郡廣信県。漢に置かれた。広西省蒼梧県。「蘇娥」について、『搜神記』、『太平御覽』八八四、『還冤志』、『法苑珠林』は「修里人」、『太平實字記』、『太平廣記』は「修理人」とある。
- ②高要——県名。漢に置かれた。廣東省德慶県の東。『後漢書』郡國志五によると、高要県は蒼梧郡に属している。「要」字、『古小説鈎沈』は「安」に作るが、『太平實字記』、『水經注』、『還冤志』、『太平廣記』、『法苑珠林』に拠って改めた。高安県は管に置かれた。安南の北の境。

- ③鵠奔亭——鵠奔」二字、『文選』注および『太平御覽』一九四に引く『謝承後漢書』、『北堂書鈔』は「鵠巢」に、『還冤志』、『太平廣記』、『法苑珠林』は「鵠奔」に作る。

- ④亭長——宿駅の長、郷村の長。秦漢の制。十里に一亭を置き、亭に長があり、盜賊の逮捕、取り調べを掌る。

- ⑤交趾——交趾。郡名。漢に置かれた。交州に属す。広西省蒼梧県。

- 「趾」字、『搜神記』、『水經注』は「州」に作る。『宋書』卷三八、州郡志四によると、建安八（二〇三）年、交趾は交州と改称されている。

- ⑥刺史——州の長官。漢の武帝の時に置かれた。詔條を奉じ、郡国を督察することを掌る。

- ⑦周敵——「周」字、『搜神記』、『太平御覽』八八四、『太平實字記』、『水經注』、『還冤志』、『太平廣記』、『法苑珠林』は「何」に作る。「敵」字、『北堂書鈔』は「勃」に作る。

- ⑧行部——領内を視察すること。

- ⑨奸罪——姦淫の罪。

11 鮑宣

故司隸校尉、上黨鮑宣字子都、少時學上計掾。於道中遇一書生。獨行無伴、卒得心痛。子都下車爲按摩、奄忽而卒。不知姓字、有素書一卷、銀十餅。即賣一餅以殯殮、其餘銀以枕之、素書著腹上。哭之、謂曰「若子靈魂有知、當令子家知子在此。今奉使命、不獲久留。」遂辭而去。

⑩至京師、有駿馬隨之。人莫能得近、唯子都得近。子都歸、行失道。遇一關内侯家、日莫住宿。見主人、呼奴通刺。奴出見馬、入白侯曰「外客盜騎。昔所失駿馬。」侯曰「鮑子都上黨高士。必應有語。」侯問曰「君何以致此馬。昔年無故失之。」子都曰「昔年上計、遇一

書生、卒死道中。」具述其事。侯乃驚愕曰「此吾兒也。」侯迎喪開柳視、銀書如所言。侯乃舉家詣闕上薦、子都聲名遂顯。至子永孫昱、竝爲司隸。及其爲公、皆乘驄馬。故京師歌曰「鮑氏驄、三人司隸再入公。馬雖疲、行步工。」

故の司隸校尉、上黨の鮑宣字は子都、少き時上計の掾に擧げらる。道中に於て一書生に遇ひ、獨り行きて伴無きに、卒に心痛を得たり。子都車を下りて按摩を爲すも、奄忽にして卒す。姓字を知らず、素書一卷、銀十餅有り。即ち一餅を賣りて以て殯殮し、其餘銀以て之に枕せしめ、素書腹上に著く。之を哭し、謂ひて曰く「若し子の靈魂知有らば、當に子の家をして子の此れに在るを知らしむべし。今使命を奉ずれば、久しく留まるを獲ず」と。遂に辭して去る。

京師に至り、駿馬有りて之に隨ふ。人能く近づくるを得る莫く、唯だ子都のみ近づくるを得たり。子都歸るに、行きて道を失ふ。遇ま一の關内侯の家あり、日莫れて住宿せんとす。主人に見はんとし、奴を呼びて刺を通す。奴出でて馬を見るや、入りて侯に白して曰く「外客騎を盗む。昔失ひし所の駿馬なり」と。侯曰く「鮑子都は上黨の高士なり。必ず應に語有るべし」と。侯問ひて曰く「君何を以て此の馬を致すや。昔年故無くして之を失ふ」と。子都曰く「昔年上計するに、一書生に遇ひ、卒に道中に死す」と。具に其の事を述べ。侯乃ち驚愕して曰く「此れ我が兒なり」と。侯喪を迎へて櫛を開きて視るに、銀と書は言ふ所の如し。侯乃ち家を擧げて闕に詣りて上薦し、子都の聲名遂に顯る。子の永孫

の昱に至り、竝びに司隸と爲る。其の公と爲るに及び、皆な驄馬に乗る。故に京師歌ひて曰く「鮑氏の驄、三たび司隸に入りて再び公に入る。馬疲ると雖も、行歩すること工みなり」と。

【通釈】

故の司隸校尉で、上黨郡の鮑宣は字を子都といい、若い時に上計の掾に推挙された。その道中で一人の書生に出会った。一人旅で同伴者もいないのに、急に胸の病に罹ってしまった。子都は車から下りて体をさすつてやったが、忽ちのうちに亡くなってしまった。書生の姓も字も分からず、手紙が一卷きと、銀十餅を持っているだけだった。そこで銀一餅を売ったお金で殯殮し、余った銀は書生の頭の下に入れ、手紙は腹の上に置いた。書生のために哭し、言うには「もしあなたの靈魂に知覚があるならば、あなたの家にあなたが此処にいることを知らせて下さい。今わたしは使命を受けているので、長く留まることが出来ないのです」と。そのまま別れの挨拶をして去った。

都に着き、駿馬があらわれて子都についてきた。他にこの馬に近づける者はおらず、子都だけが近づくことができた。子都が都から帰る時、途中で道に迷った。たまたま關内侯の家があり、日も暮れたので泊まらせてほしいと思い、主人に会うため、下男を呼んで名刺を渡した。下男は出てきて馬を見るや、戻っていつて侯に「外の客は馬泥棒です。以前いなくなつた駿馬を連れております」と申し上げた。侯が言うには「鮑子都は上黨郡の高士だ。話を聞いてみるべきだろう」と。侯は子都に尋ねた「あなたは何故この馬を連れてくるのですか。この馬はどういう訳か先年から行方知れずになつて

いたのです」と。子都は「先年の会計報告の際、一人の書生に遇ったのですが、道中で急に亡くなってしまいました」と言った。その事の次第を詳しく説明した。侯は乃ち驚愕して「それは私の息子だ」と言った。侯は棺を引き取らせて外の箱を開けて見てみると、銀と手紙は子都が言った通りだった。侯はそこで家をあげて官に出向いて推薦し、そうして子都の評判は広く知られるところとなった。子の永孫の昱に至るまで、すべて司隸となった。彼らが公となった時には、みな青馬に乗った。それで都では「鮑氏の青馬、三たび司隸に入って再び公に入った。馬は老い衰えたが、その歩みは達者なものだ」と歌われた。

【語釈】

*この話は『藝文類聚』八三、『事類賦注』二一、『太平御覽』二五〇および八一二、八九七に見える。『北堂書鈔』六一に「鮑宣至子永孫昱、俱爲司隸。乘驄馬。京師歌之曰、鮑氏驄、三人司隸再入公。馬雖疲、行步通」の三十五字が見える。また、この話は『太平廣記』一六六に引く『獨異志』に見える。

①司隸校尉—官名。漢の武帝の時に置かれた。中央官吏の監察官。「校尉」二字、『藝文類聚』に無し。

②上黨—郡名。今の山西省の東南部。戦国時代の韓の地。

③鮑宣字子都—鮑宣は、漢、高城の人。字は子都。学問を好んで經書に通じていた。『漢書』七二、『後漢書』五九「宣字」二字、『事類賦注』に見える。

④上計掾—毎年郡国から上京して会計報告をする役職。「掾」字、『藝文類聚』及び『太平御覽』八九七に無し。

⑤銀十餅—「銀」字、『太平廣記』は「金」に作る。「餅」は、餅の

ように薄く平らなものを数える。

⑥殯殮—遺体を仮に棺に納めて置いておくことをいう。

⑦其餘銀以枕之、素書著腹上—この十一字、『藝文類聚』は「餘銀以坑之、素書著腹上」(餘銀以て之を坑にし、素書腹上に著く)十字に、『太平御覽』二五〇は「其餘銀及素書著腹上」(其餘銀及び素書腹上に著く)九字に、『太平廣記』は「其餘枕之頭下、置素書於腹傍」(其餘之を頭下に枕せしめ、素書を腹傍に置く)十二字に作る。

⑧哭之—遂辭而去—この三十字、『北堂書鈔』及び『太平廣記』に無く、『事類賦注』は「埋之」二字に作る。「哭」は、葬儀の儀礼。声を上げて泣き叫ぶこと。

⑨至京師—以下の句、『藝文類聚』及び『太平御覽』八一二に無し。

⑩關内侯—関内の諸侯で封邑は無い。

⑪見主人—必應有語—この三十七字、『太平御覽』二五〇に見える。「高士」は、志高く節を堅く持している人。品行の高尚な人。

⑫君何以致此馬、昔年無故失之—この十二字、『事類賦注』及び『太平御覽』八九七は「昔年無故失之」六字が無く、『太平御覽』二五〇は「若此乃吾馬。昔年無故失之」(此の若きは乃ち吾が馬。昔年故無くして之を失ふ)十一字に作る。

⑬榔—うわひつぎ。棺を納める外箱。

⑭侯乃舉家詣闕上薦、子都聲名遂顯—この十四字、『事類賦注』は「侯乃薦子都辟公府、至司隸」(侯乃ち子都を薦めて公府に辟し、司隸に至る)十一字に、『太平御覽』八九七は「侯乃舉送詣闕上薦、子都辟公府侍御史豫州牧司隸校尉」(侯乃ち舉げて闕に送詣

して上薦し、子都 公府の侍御史・豫州牧・司隸校尉に辟さる）二十三字に、『太平廣記』は「舉家感子都之德義、由是聲名大振」（家を擧げて子都の德義に感じ、是れ由り聲名大いに振るふ）十四字に作る。

⑮至子永孫昱く行歩工―この三十八字、『藝文類聚』、『太平御覽』八一二、『太平廣記』に無し。「馬雖疲、行歩工」六字、『事類賦注』及び『太平御覽』八九七は「馬雖瘦、行歩工」に、『太平御覽』二五〇は「馬雖疲、行歩轉工」七字に、『北堂書鈔』は「馬雖疲、行歩通」に作る。

⑯驄馬―あおうま。青白色の馬。

12 費長房(一)

①汝南有妖。常作太守服、詣府門椎鼓。郡患之。及費長房知是魅、乃呵之。③即解衣冠叩頭、乞自改變爲老臈。大如車輪。長房令復就太守服、作一札、敕葛陂君。叩頭流涕、持札去。視之、以札立陂邊、以頸繞之而死。

汝南に妖有り。常に太守の服を作し、府門に詣りて鼓を椎つ。郡之を患ふ。費長房是の魅なるを知るに及び、乃ち之を呵す。即ち衣冠を解きて叩頭し、乞ひて自ら改變して老臈と爲る。大なること車輪の如し。長房復た太守の服に就か令め、一の札を作し、葛陂君に敕す。叩頭流涕し、札を持ちて去る。之を視るに、札を以て陂邊に立て、頸を以て之に繞ひて死す。

【通釈】

汝南に妖怪がいた。いつも太守の服を身につけ、役所の門までやって来て鼓を打った。太守はこれを憂えた。費長房はそれが妖怪の仕業であると知ると、それをしかりつけた。すると直ぐに衣服や冠を解いて叩頭し、許しを乞うて老いたすっぽんに変身した。その大きさは車輪ほどであった。長房は再び太守の服を身につけさせ、一枚の札を作ると、葛陂君に命令した。（妖怪は）頭を地につけて涙を流し、札を持って去った。これを見ると、札を陂の側に立て、そこに頸を掛けて死んでいた。

【語釈】

*この話は『太平廣記』四六八に見える。

①汝南―郡名。漢に置かれた。治は平輿。河南省汝南県の東南。河南省旧汝寧・陳州の二府、及び安徽省潁州府の地。

②費長房―後漢、汝南の人。仙術を会得して名をあげた。（『後漢書』一一二）『太平廣記』は、この下に「來」字を置く。

③呵―しかる。

④叩頭―頭を地につけておじぎをすること。叩首。

⑤令復就太守服―『古小説鈎沈』には「令」字が無いが、『太平廣記』に拠って補った。

⑥葛陂君―水神の名。「葛陂」は、湖沼の名。河南省新蔡県の北。

13 費長房(二)

費長房能使神。①後東海君見葛陂君、淫其夫人。③於是長房敕繫三年、而東海大旱。長房至東海、見其請雨。乃敕葛陂君出之、即大雨。

費長房能く神を使ふ。後に東海君葛陂君に見ふに、其の夫人を淫す。是に於て長房、敕して繋ぐこと三年、而して東海大いに旱す。長房東海に至り、其の雨を請ふを見る。乃ち葛陂君に敕して之を出さしむれば、即ち大いに雨ふる。

【通釈】

費長房は神を使役することができた。後に東海君が葛陂君と会ったことがあったが、その時に葛陂君の夫人を姦淫した。そこで長房は命じて三年のあいだ投獄させたが、そうすると東海では大変な干魘が起こった。長房は東海に行き、その地の人々が雨を請うのを目にした。そこで葛陂君に命じて東海君を獄から出させると、直ぐに大雨が降り出した。

【語釈】

*この話は『太平御覽』八八二および『太平廣記』二九三に見える。

①神—『太平廣記』は「鬼神」二字に作る。

②東海君—東の海に住むといわれた水神。

③於是長房—この四字、『太平御覽』は「於是房」三字に作る。

④即大雨—この三字、『太平廣記』は「即大雨也」四字に作る。

14 費長房(三)

費長房又能縮地脈。坐客在家、至市買鮓。一日之間、人見之千里之外者數次。

費長房又能く地脈を縮む。坐客家に在れば、市に至りて鮓を買ふ。一日の間に、人之を千里の外に見し者數次あり。

【通釈】

費長房はまた地面を縮めることが出来た。客人が家にいる時は、市場へ行つて鮓を買った。一日の間に、長房を千里も離れた所で見た掛けた者が何人もいた。

【語釈】

*この話は『藝文類聚』七二および『太平御覽』八六二に見える。

①縮地脈—大地を縮めて、遠い土地をも近くすること。仙術で行う法。

②見之千里之外者數次—この九字、『藝文類聚』及び『太平御覽』は「見之千里外者數處」に作る。

15 馮夫人

漢桓帝馮夫人病亡。靈帝時、有賊盜發冢。七十餘年、顔色如故、但小冷。共姦通、至鬪爭相殺。寶太后家被誅、欲以馮夫人配食。下邳陳公建議以「貴人雖是先所幸、尸體穢汚、不宜配至尊。」乃以寶太后配食。

漢の桓帝の馮夫人病みて亡す。靈帝の時、賊盜の冢を發く有り。七十餘年なるに、顔色故の如くして、但だ小しく冷たきのみ。共に姦通し、鬪爭して相ひ殺すに至る。寶太后の家、誅せられ、馮夫人を以て配食せんと欲す。下邳の陳公、建議して以へらく「貴人は先きに幸する所と雖も、尸體穢汚さるれば、宜しく至尊に配すべからず」と。乃ち寶太后を以て配食す。

【通釈】

漢の桓帝の妃であつた馮夫人は病氣で亡くなった。靈帝の時、盜賊がその墓をあばいた。七十年以上も経っているのに、顔色は生前のままで、体が少し冷たくなっているだけだった。盜賊どもは夫人を犯し、喧嘩になつて殺し合つた。竇太后の家族が処刑され、(桓帝の墓に)馮夫人を配食しようとした。下邳出身の陳公は意見を出して「貴人は先帝の寵愛を受けたとはいえ、死体が汚れているから、至尊の君と並べて葬るべきではない」とした。そこで竇太后の墓を並べて築くことになった。

【語釈】

*この話は『藝文類聚』三五に見える。また、この事は『搜神記』卷一五『法苑珠林』一一六・『太平御覽』五五九引、『幽明録』(『瑠玉集』一四引)、『後漢書』卷五六・陳球傳および卷六五・段熲傳に見える。

漢桓帝馮貴人病亡。靈帝時、有盜賊發冢。七十餘年、顔色如故、但肉小冷。羣賊共奸通之、至鬭爭相殺。然後、事覺。後竇太后家被誅、欲以馮貴人配食。下邳陳公建議以「貴人雖是先帝所幸、尸體穢汚、不宜配至尊。」乃以竇太后配食。(『搜神記』一五)

漢の桓帝の馮貴人病みて亡す。靈帝の時、盜賊の冢を發く有り。七十餘年なるに、顔色、故の如くして、但だ肉、小しく冷たきのみ。羣賊、共に之を奸通し、鬭爭して相ひ殺すに至る。然る後、事覺。後竇太后の家、誅せられ、馮貴人を以て配食せんと欲す。下邳の陳公、建議して以へらく「貴人は是れ先帝の幸する所と雖も、尸體、穢汚さるれば、宜しく至尊に配すべからず」と。乃ち竇太后を以て配食す。

馮貴、前漢漢桓帝貴人也。美豔絶雙。死後卅餘年、羣賊發其塚、見貴人顔色如故。賊遂競奸之、鬭爭相煞而死。(『瑠玉集』一四引『幽明録』)

馮貴は、前漢漢の桓帝の貴人なり。美豔絶雙なり。死して後、卅

餘年、羣賊、其の塚を發き、貴人を見るに顔色、故の如し。賊遂に競ひて之を奸し、鬭爭して相ひ煞して死す。

- ① 漢桓帝—後漢、第十一代皇帝。章帝の曾孫。名は志。本初元(一四六)年、梁太后に徴されて即位した。在位二十一(一四六—一六七)年。年号は建和、和平、元嘉、永興、永壽、延熹、永康。(『後漢書』七)

- ② 馮夫人—『搜神記』は「馮貴人」に作る。『後漢書』陳球傳および段熲傳に見える。

- ③ 靈帝—後漢、第十二代皇帝。章帝の玄孫。名は宏。桓帝に子が無かつたため、竇太后に擁立された。在位二十二(一六八—一八九)年。年号は建寧、熹平、光和、中平。(『後漢書』八)

- ④ 七十餘年—『藝文類聚』は「七十餘年」、『法苑珠林』及び『太平御覽』は「百歳」、『幽明録』は「卅餘年」に作る。桓帝の在位は一四六年から一六七年、靈帝の在位は一六八年から一八九年であり、合わせても七十年を越えないため「三十餘年」が是と考えられる。

- ⑤ 共姦通—この三字、『藝文類聚』は「共姦通之」四字に作る。

- ⑥ 竇太后家被誅—乃以竇太后配食—この四十三字、『幽明録』に無く、『法苑珠林』及び『太平御覽』は「然後事覺」四字に作る。

- ⑦ 配食—ともに埋葬すること。

- ⑧ 下邳陳公建議—「陳公」は陳球のこと。字は伯真で、下邳の人であつた。「建」字、『古小説鈎沈』は「達」に作るが、『後漢書』陳球傳に拠つて改めた。建議の内容は『後漢書』陳球傳には「球即下議曰：『…馮貴人家墓被發、骸骨暴露、與賊併尸、魂靈汚染。

且無功於國、何宜上配至尊。」（球即ち議を下して曰く「：且つ馮貴人の冢墓發かれ、骸骨暴露し、賊と尸を併せ、魂靈汚染す。且つ國に功無きに、何ぞ宜しく至尊に上配すべけんや」と。）とある。

16 蒋子文

蒋子文、漢末爲秣陵尉。自謂「骨青、死當爲神。」

蒋子文、漢末に秣陵の尉と爲る。自ら謂ふ「骨青ければ、死すれば當に神と爲るべし」と。

【通釈】

蒋子文は、漢の末に秣陵の尉になった。自ら「私の骨は青いで、死んだらきっと神になるだろう」と言っていた。

【語釈】

*この話は『太平御覽』三七五に見える。

①秣陵―県名。秦に置かれた。江蘇省江寧県の東南。

②尉―秦漢の官名。軍事・警察を掌った。

〔二〇一二・九・二七 受理〕